

私の学生時代

渡邊 健司（教育・昭和47年卒）

丸亀支部長の前田氏からの原稿依頼を軽く引き受けたものの、いったい何をどう書けばいいのかと久しぶりに頭を悩ませた。

卒業してはや半世紀近くが経過していたことに驚いている。私は、43年4月に入学し、保健体育研究室（通称体研）に所属していた。4年間の学生時代には、たくさんの思い出が残っている。辛かった思い出、悲しかった思い出もたくさんあったと思うのだが、全てが楽しい思い出として残っていることに驚いている。

○ 世の中

三億円事件 多発した大学紛争 アポロ 11号の人類初の月面着陸 大阪での万国博覧会の開催

大学紛争では我が香川大学も例外ではなく、大学本部が一時占拠されて建物屋上から火炎瓶が投げつけられていたことを覚えている。

○ 学生気質

一般的に40年代の学生にはまだまだバンカラといわれる体質が引き継がれていた最後の時代だといわれていたらしい。

入学して数か月後だったか、伝説となっている体研の先輩のある所業を聞かされた時のことであった。それは私たち同期生の常識の範囲を超えたものであった（その所業の内容が真実か否かは未だに定かではないため、書くことは控える）がために、インテレクチュアルな大学生活を送りたいと決心したものである。

そんな思いで過ごしていたので、私たちの時代は、当てはまらないとは思っている（そんなことはないとの先輩や後輩諸氏のお叱りの言葉が聞こえてきそうだ）。

○ 体研での生活

楽しい思い出として残っていると最初に書いたように、体研での仲間たちや先生方との交流は、家族・一家のような集団でした。それは中島先生を中心に、他の先生方のご指導を頂いていたおかげだと思っている。例えば、先生方の研究室への出入りが許されるような雰囲気を作ってくれていた。教材の専門書を借りに、また、分からなかった授業内容についての指導を受けに行く等の口実を設けてはお茶を飲みに通っていた。先生方には私たちの魂胆は想定内のことだったようだが、常に優しく、私たちを包み込むように接していただいていたと思っている。そのような先生方との関係は他大学出身の友人たちに羨ましがられていたことを覚えている。